

## 別記様式第6

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	市川 裕士
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 室町幕府の地方支配と地域権力			
論文審査担当者			
主査教授	本多 博之		
審査委員教授	西別府元日		
審査委員教授	勝部 真人		
審査委員教授	中山 富廣		
審査委員教授	井内 太郎		
審査委員	愛媛大学教育学部教授	川岡 勉	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、室町幕府の国内支配について、地域権力である守護・国人の動向をふまえて検討することにより、南北朝・室町期における武家権力による国内支配を構造的に明らかにしたもので、序論、本論3部9章、そして結論からなる。</p> <p>序論「研究史の整理と課題」では戦後の日本中世史研究を概観し、川岡勉氏の室町幕府一守護体制論など主要学説を紹介しながら課題を提示し、論文構成について述べる。</p> <p>第一部は、中央政権としての幕府論であり、室町幕府の国内支配について考察する。</p> <p>第一章「南北朝・室町初期における室町幕府の地方支配と地域権力」では、「戦時」体制下で行われた守護権限を拡大する「分権化」政策が足利義満期には見られなくなり、地域権力の自立化が抑えられ、地域権力に対する室町殿（将軍）の絶対性・優位性が確立したとする。</p> <p>第二章「応永・永享年間における室町幕府の地方支配と地域権力」では、幕府が室町殿の上意を中心に紛争を調停・解決することで「無為」の実現を図り、地域権力は上意を執行する地方支配の担い手となり、幕命に従うことで問題の解決を図ったとする。</p> <p>第三章「嘉吉の乱後の室町幕府の地方支配と地域権力」では、将軍足利義教が殺害され、幕府の地方支配が動揺するなか、守護・国人など多様な地域権力の自立化が進んだとする。</p> <p>第二部は地域権力としての守護論であり、西国の有力守護山名氏について検討する。</p> <p>第一章「南北朝動乱と山名氏」では、南北朝動乱の中で惣領山名時氏のもと同族連合体制の原型ともいべき体制が構築されたが、それは幕府や国人・被官との関係から様々な影響を受ける中で動揺し、明德の乱後は分国が大幅に削減されたとする。</p> <p>第二章「安芸守護山名氏の分国支配と地域社会」では、国人間の連携により所領問題の解決が図られる安芸国の特色をふまえ、守護山名氏が幕府権力を背景に国人との関係を築き、地域社会における秩序維持の担い手としての役割を果たしたとする。</p> <p>第三章「室町期における山名氏の同族連合体制」では、山名氏一族の分国で惣領持豊を中心とする体制が15世紀中頃に構築されており、持豊が一族・被官を統制するとともに、所領支配を保障する社会秩序の確立に向けた動きが見られたとする。</p> <p>第三部は、地域権力としての国人論であり、西国の国人三氏を取り上げて論じる。</p> <p>第一章「安芸国人沼田小早川氏と室町幕府・守護」では、有力奉公衆であった沼田小早川氏が幕府の安芸支配において中核的な役割を求められるとともに、安芸国人と連携して地域社会の政治課題解決のため行動したとする。</p>			

第二章「備後国人宮氏・一宮と室町幕府・守護」では、宮氏が備後一宮一吉備津社と密接な関係を持ち、吉備津社領の契約を媒介として備後国人との関係を形成するとともに、一宮との関係を背景に幕府から地方支配の担い手として位置づけられたとする。

第三章「伊予国人大野氏と室町幕府・守護」では、伊予山間部を本拠とした国人大野氏が伊予・土佐の国境を越えて形成された国人間の連携を仲介する役割を担っていたことを明らかにし、幕府と守護細川氏は大野氏を通じて地方支配を展開することで地域社会の安定を図ったとする。

最後に、結論として本研究の総括を行うとともに、残された課題を提示する。

本論文は、政策論・制度論中心で、地域情勢や在地支配についての言及が不十分だが、同族連合体制など守護山名氏に関する新たな指摘や、備後宮氏や伊予大野氏など国人の実態解明は貴重な成果であり、武家権力の支配を幕府・守護・国人それぞれの面から丹念に分析した点は高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。